



Anti-invasion Asian Student Joint Action  
Philippine exposure 2004

# フィリピンツアー 報告パンフ 2004

## グローバリゼーション

教育の現状と学生の運動  
フィリピン労働運動の現場訪問記  
パヤタス 都市貧困地区コミュニティ

## 戦争と米軍基地問題

米軍基地跡と住民の苦悩  
イスラム教徒のコミュニティ訪問記  
少数民族アイタ族と交流して

## 女性解放運動

ロラの家 まだ解決していない「慰安婦」問題  
赤線街をフィールドワーク





# 現状のフィリピンを、日本に住む できるだけたくさんの人に伝えていきたい



04年度のフィリピンツアーもLFSの広範な人脈と大きな協力に助けられ、私たちフィリピン訪問団は有意義な10日間をフィリピンの人々と共有させて頂きました。

31日にフィリピンの空気を初めて胸に吸い込んだ私たちに、早速LFSから予定外の提案が!!

丁度LFSが映画会を主催しているということでUP (University of Philippines) デリマン校に「LUZIA」という映画を見に行きました。

その映画は主人公である子どもさんのお母さん(LUZIA)を中心に、現代のフィリピン社会を見つめたもので、始めは自分の家族の安全を考えているLUZIAが家族に起こる様々な事件を経て社会に関わる運動を理解し、参加

しようとしていくものでした。漁民だった家族は漁で生計を立てていたのに、海が汚染され政府から急な立ち退きを命じられました。

それでも、これまで生活を共にしてきた海と共にこの先も生活をしようとした家族でしたが、まもなく銃殺された父親の死体が海岸に流れ着きました。LUZIAは結婚する長女に別れを告げ、家族を連れて先に村を出た知り合いを頼りに街に身を移しました。街での様々な生活が子どもたちの前に無防備にさらされました。次女は縫製工場で働き、LUZIAは長男を学校に行かせようと考えていました。三女は自分も学校に行きたいと思っていただけ、家にはお金がないから学校に行けないと知っていました。ある日、LUZIAは自分の写真を撮ってもらっ

てお金を稼いでいた三女を見つめ、ひどく怒って彼女を家から追い出してしまいました。そしてこの土地もまた強制立ち退きが行われ、銃や盾を持った機動隊が突っ込んできました。その時におじいさんを亡くしました。LUZIAは次女が労働組合に入ることに反対しました。長男は学校に入りま

に行けずにはいました。そんな子どもたちと一緒にシンナーや麻薬に手を出した長男は警察の手にかかり、逃げ惑う最中に銃殺されてしまいました。LUZIAは次の朝、ゴミの山に横たわる息子の遺体を抱えて泣いていました。

到着して突然フィリピン社会の重たい現実を突きつけられた私たちは、しばし呆然としていました。

さらに、この話は少し昔の話だろうと期待してした質問にLFSのメンバーから「LUZIA」は今のフィリピン社会の状況を表している、現状はますますひどい状況になっていると伝えられました。

訪問の先々では、現状のフィリピンを日本に住むできるだけたくさんの人に伝えて欲しい、日本政府に働きかけて欲しい、日本人々は日本政府が再び戦争に向かうことを許さないで欲しいとお願

8/30

### ツアー参加者で事前学習

テーマ学習：「戦後補償・『慰安婦』問題」  
「フィリピンの先住民」「ODA問題」「フィ  
リピンの教育」

8/31

### マニラ到着

#### 映画「ルシア」の鑑賞



マニラに  
到着／映  
画「ルシ  
ア」を鑑  
賞／フィ  
リピン社  
会の問題

像の紹介

9/1

### レクチャーと大学訪問

フィリピン社会のレクチャー／学生との交  
流・PUP訪問／サンミゲルのピケット訪  
問

9/2

### パヤタス訪問

UPデリマン校訪問／都市貧困地区コミュ  
ニティーのパヤタス訪問

9/3

### 女性問題についてレクチャー ロラの家訪問

ガブリエラ・  
ユースから女性  
問題についてレ  
クチャー／ロラ  
の家訪問



9/4

### パンパンガ州に移動 赤線街フィールドワーク



パンパン  
ガ州・ア  
ンヘレス  
市入り／  
多くの学  
生と交流

／クラーク米軍基地跡訪問／赤線街フィー  
ルドワーク

9/5

### アイタ族訪問

少数民族アイタ族のコミュニティー訪問

9/6

### 住民へのインタビュー

撤去後のクラーク基地で汚染被害を受けた  
住民を訪問

9/7

### イスラムコミュニティ訪問

国会前での抗議行動に参加／イスラムコ  
ミュニティー訪問／観光(イントラムロス)

9/8

### 労働組合・ピケット訪問

南部タガログ地区の労働組合と、ピケット  
の現場を訪問

9/9

### 帰国

LFSとツアー全体ふり返り／帰国

# フィリピンツアー報告パンフ2004

## ■レクチャー 4

PART① トライアングルなフィリピン社会の階級構造

PART② 帝国主義が引きおこすフィリピンの貧困の現状

## ■教育の現状と学生の運動 8

人権と民主主義のための教育を目指して

## ■ロラの家 10

まだ解決していない「慰安婦」問題

## ■フィリピン労働運動の現場訪問記 16

豊かさの足下にあるもの

## ■米軍基地跡地と住民の苦悩 23

クラーク基地跡を訪れて

少数民族アイタ族と交流して 28

9月4日  
赤線街をフィールドワーク 14

イスラム教徒の  
コミュニティ訪問記 26

パヤタス  
都市貧困地区コミュニティ 22

### おまけ

ツアー日常のフォトアルバム 27

■メールニュース 30  
ルイシタ農園で  
暴力的ストライキ破壊  
アナクパウイスの  
コーディネーター銃殺される

■よびかけ 31  
フィリピンツアー  
参加者を募集しています

■謝辞 1

■ツアー日程表 2

■ツアー参加者の感想 32

# ■レクチャー PART ①

## トライアングルなフィリピン社会の階級構造

ツア―2日目、LFSの  
ベアさんから、フィリピン  
社会の階級抑圧と搾取の構  
造についてレクチャーを受  
けました。以下にその内容  
をまとめます。

### 大地主

### 買弁資本家

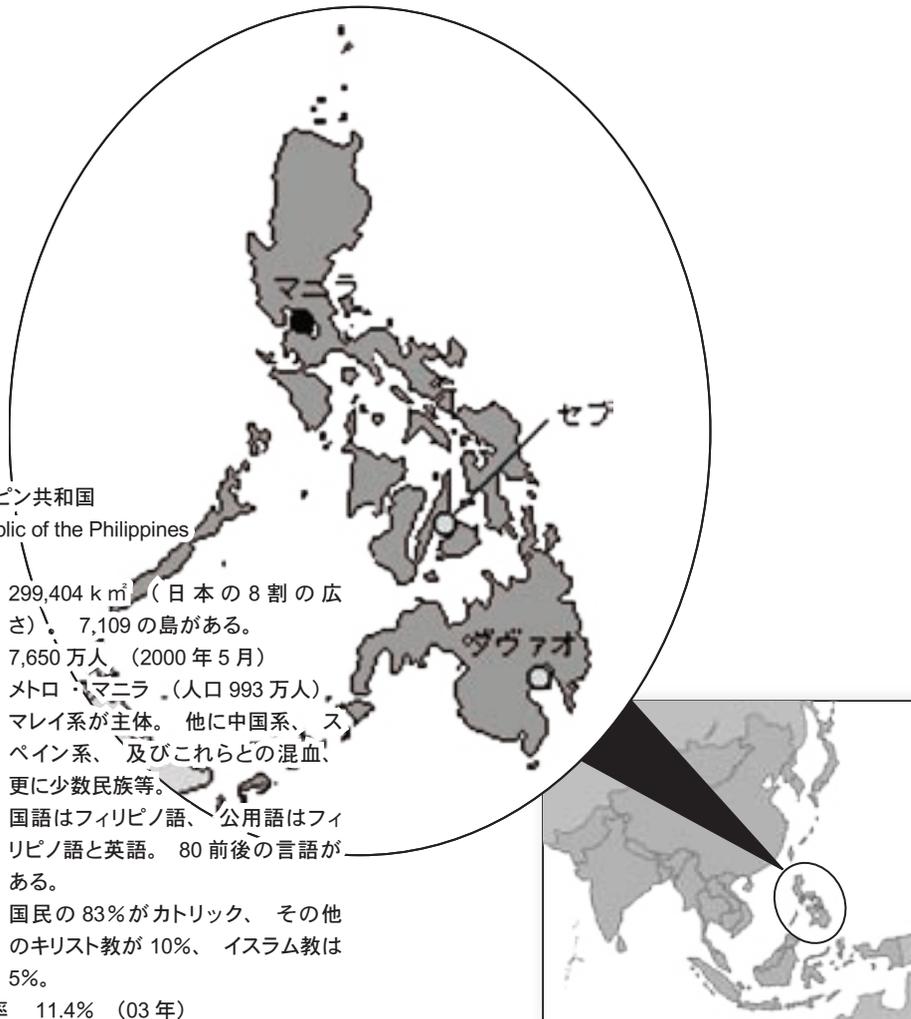
大地主は、300年以上  
のスペインの植民地支配が  
もたらした階級。農民を働  
かせ、小作料で収入を得て  
いる。

買弁資本家は、大地主  
出身で外国企業の現地代理  
人。

人口のほんの1%の大地  
主と買弁資本家でフィリピ  
ンの農地の80%を所有し、  
外国企業と提携し富を独占  
している。

### 現地資本家

現地資本家はフィリピン  
の資本家。フィリピンでは、  
資本も多く技術力もある多  
国籍企業との競争に負けて  
つぶれていつている。フィ  
リピンのものよりもアメリ  
カのものの方がいいなあと  
いう植民地的な志向も影響  
している。



## プチブルジョアジー インテリ

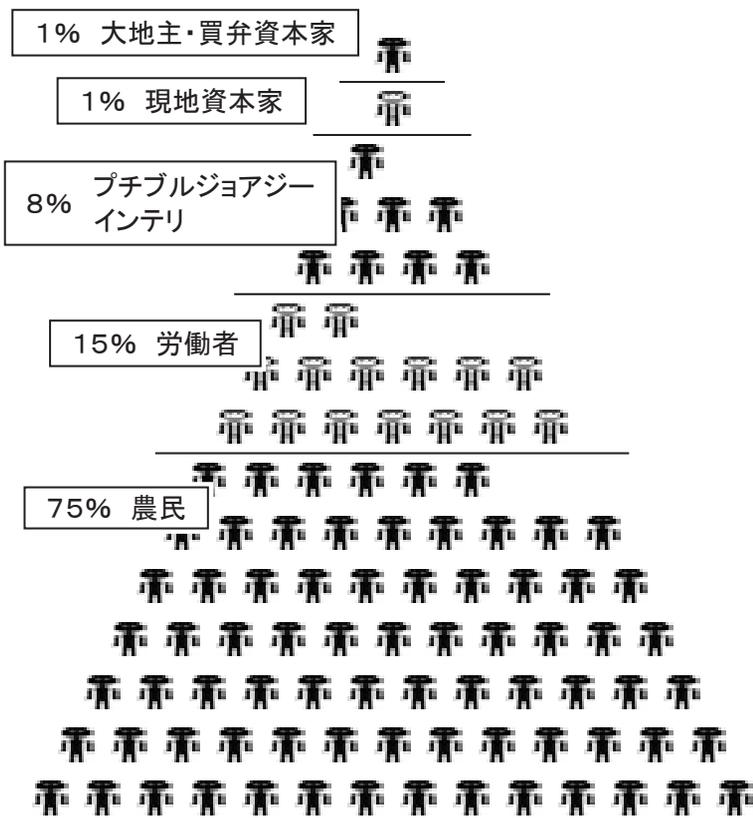
大学を出てお医者さん、技術者として働いている人、又は小さな自営業。例えば、先生のお給料は月に大体1200ペソ。政府は6人家族が必要なお金は1日大体590ペソとしているから、先生のお給料でも家族を養って生活することは厳しいことが分かる。

## 労働者

多国籍企業か地元企業の多国籍企業か地元の企業で働いている。最大の問題は低賃金であること。政府は地域別や産業別に最低賃金を設定したりして格差が広がっている。又、政府の政策により契約労働者が日に増しに増えている。契約労働者は社会保障が受けられなかったり、法廷最低賃金が守られないことが多い。

## 農民（小作人）

収穫量の70%を小作料として地主に渡し、残りほんの30%で生活をしている。大地主の決定で輸出用の現金作物（アスパラ、バナナなど）をたくさんつくっているため、国内でお米が足りなくなったりしてタイから輸入している。機械化が進まず、水牛で土地を耕す



農民がほとんど。又、フィリピンの気候を利用すれば1年に3〜4回の収穫が見込めるのに、灌漑施設が整備されておらず、できていない。

政府の対応は最悪。

アキノ政権以降すべての政権が包括的な農地改革を唱えている。例えば、十年以上耕せば、耕した人がその土地を合理的な価格で買うことができるという政策がある。が、地主が高い値段で売ろうとしたり、地

主が私兵を雇って農民を暴力的に抑えたりする（農民運動のリーダーはよく殺されている）ため、このような政策はほとんど失敗している。大地主出身のアキノ政権は、一人当たり5ヘクタール以上の土地を所有できないとした。しかし、彼女はあちこちの親戚に農地を分配したり、農地に石や砂をまいて農地でないと主張し、その後工場を誘致したりして、結局小作人に土地を渡さなかった。

## 政治状況

6月10日の全国選挙：歴史上最も暴力と不正が行われた。選挙活動期間、農村部では詐欺のパフォーマンスを繰り返し、買収が横行した。

財政危機にともなって新しい税金を作った。タバコ、MRT（マニラの鉄道）、電気、携帯など。外国の企

業を積極的に受け入れるため、大企業に税をかせないのがアロヨ政権の方針だ。

人口の半数以上が貧困、社会の構造、特に分配の不平等に原因がある。

：一つの大きな背景は？  
次のページに続く

# レクチャー PART ②

## 帝国主義が引き起こすフィリピンの貧困の現状

9月2日、フィリピン大学デリマン校のグレッグさん（アナクバヤンのメンバー）から、フィリピンの歴史と現在の植民地状態の説明、貧困の中から解放運動―革命運動へと農民・労働者が身を投じていることを、レクチャーしていただきました。

紀元前	現在の大部分を占めるフィリピン人の先祖であるマレー人が移動してくる。
5世紀頃	マゼラン、サマール島に上陸する。
1521	レガスピ遠征隊、セブ島を征服する。
1565	パンパンガで蜂起。これ以降も各地で蜂起が起きる。
1585	
1892	ホセ・リサル、フィリピン同盟結成。流刑にされ、後に処刑される。
1896	ボニファシオ秘密結社カティプナン結成。ボニファシオ、武装蜂起する。
1897	アギナルド、カビテで武装蜂起する。アギナルド、革命政府を樹立し大統領になる。
1897	ボニファシオ、アギナルド派により処刑される。

### 必要なものを分け合う社会

植民地支配の前、フィリピンは原始共産制の社会であった。獲れた食料をはじめに必要なものは分け合って生活を営んだ。

抗してフィリピン人は闘った。

### 今に続くアメリカの支配

スペインの植民地支配  
フィリピン社会にそれまであった文化は破壊され、奴隷制度も始まり貧困が広がった。植民地支配・強制労働・教会による支配に抵抗

スペインによる植民地支配は終わった。が、フィリピンの人々の力でスペインを追い出したわけではなかった。アメリカの世界進出が始まり、スペインに変わってアメリカ資本主義が乱入し支配が始まった。1920年の米比戦争以降、半封建半植民地支配が始まり、大地主のためだけ

1521-1890年	原始共産主義	→	封建制
	スペインの植民地支配	V S	フィリピン人の抵抗
	大地主	V S	小作人
1896年	民族民主主義革命		

1898	米西戦争勃発し、米はフィリピンを占領。パリ講和条約、アメリカの領有にされる。
1931	パンガシナンで反米蜂起。
1941	アジア太平洋戦争が始まる。
1942	日本軍マニラ入城、軍政布告する。フクバラハップ(抗日人民軍)結成される。
1945	米軍マニラ突入(コモンウェルス政府マニラへ)、日本無条件降伏する。
1946	ロハス政権発足。フク団の議席を剥奪する。独立宣言、フィリピン共和国成立する。
1972	マルコス大統領、戒厳令を布告する。イスラム教徒の蜂起、内戦状態へ。
1981	戒厳令停止、マルコス再選される。
1983	アキノ元上院議員、マニラ国際空港で暗殺される。葬儀に200万人の市民参列。
1986	大統領選行われ、国民議会がマルコスの当選を宣告する。市民が蜂起。アキノ大統領就任の宣誓。マルコス米軍ヘリで国外脱出する。
1992	米比基地協定の破棄により、全ての在比米軍基地を撤退させる。
1999	米軍の駐留を認める米比駐留軍事協定(VFA)、反対の声の中結ばれる。
2002	「対テロ戦争」を名目とした米比合同軍事演習(バリカタン)により、米軍駐留。

ではなく資本のために、アメリカに売るために働かねばならない社会構造が押し付けられた。暴力による支配はスペインが300年以上の支配で殺したフィリピン人よりもさらに多くの命を奪った。

農業資源、鉱山資源、石油資源がアメリカの企業により独占され、今に続く。

### 日本帝国主義の破壊と侵略

1941年以降、日本は利益と市場を狙って東南アジアにやって来た。アメリカと市場分割のため激しい破壊を繰り返した。アメリカは日本に原子爆弾を投下し20万人以上の人々を殺した。

### 帝国主義は：

利益のために人の命を奪う。  
経済的な貧困層を生み出し人を殺す。  
過酷な労働を強いて人を殺す。  
環境汚染によって人を殺す。  
戦争を繰り返して人を殺す。

フィリピン人は!!  
貧困と死をもたらす  
帝国主義に抵抗して  
闘っている!!

植民地支配が始まる前のフィリピン社会に、限りない競争ではなく人々の協同を大切にした社会を目指している。みんなが食べられて、フィリピンの工業が発展する社会。

アメリカ帝国主義を追



い出すために全国的な革命運動を行っており、たくさんフィリピン人が今のイラクの人々と同じように武器を持ってアメリカに抵抗している。特に田舎の方では本格的で、多くの人が武器を持って立ち上がっている。



ホコ島での抗日ゲリラ軍

# ■教育の現状と学生の運動 人権と民主主義のための教育を目指して



UP  
(フィリピン大学)  
デリマン校



UPの学内  
地域に開かれた  
印象



知識があれば  
服も要らない  
(笑)

フィリピンの教育制度の基本は6・4・4・制。初等学校6年間、中等学校（ハイスクール）4年間、高等教育（大学など）4年間。憲法（1987年2月に成立）では初等教育を無償教育から無償義務教育とした。

就学率・識字率は高い。ほぼ100%の子ども達が就学し、成人の識字率は95%と言われている。アメリカの影響が大きい（1898〜1946はアメリカの領有下）。しかし、初等教育卒業までに3割以上の子ども達が退学・留年している。教育は「巨大産業」。教育・文化・スポーツ省が占める割合は国家公務員の3割以上。私立学校も多

い。初等教育では、公立学校が約40000校で私立学校が約32000校、中等教育では、公立学校が約4200校で私立学校が約2800校。

## commercialization

大学の商業化は、学費を上げ、大学の設備の一部を企業に売るに至らせる。

必要なものは、科学的な教育システム、大衆のための教育システム、民族主義のための教育システム。

政府の予算優先順位は、  
①外国への債務の支払い、  
②軍事費、③教育予算。そのため  
の財政難↓教育費の削減。



PUPの  
LFSメンバーの  
レクチャー



学内掲示板  
「教育費カットに  
反対!!」



国会前で  
財政危機への  
抗議行動

結果、08年までに現在  
120校の国立大学を48  
校に削減する計画。

## フィリピン工科大学 (PUP) の状況

生徒数は、5万人。労働  
者や農民の子が多い。

政府がPUPに当てた予  
算は、20億ペソ↓5億ペソ  
(04年から)へ激減。その  
内の90%は、固定費である  
教員の給料に支払われるの  
で、設備投資(メインキャ  
ンパス+11のブランチ)へ  
はほんの10%しか残らな  
い。

そのため、学費値上げと、  
学生生活に必要な50種類以  
上の細かいことに、次のよ  
うに値段がつくられた。  
結果、全体として10倍の学  
費値上げ:。

- 【成績証明書】1枚50ペソ
- 【パソコン使用料】1時間  
20ペソ
- 【学費滞納】10ペソ↓20ペ

ソ(1セメスターにつき)  
【カリキュラム表コピー】  
20ペソ

- 【学位証】一枚50ペソ
- 【エアコンの無いOA教室  
使用料】五百ペソ
- 【エアコンの有るOA教室  
使用料】千ペソ

## フィリピン学生に インタビュー

授業は、専門3単位(必  
修)、教養2単位(必修)。  
1教科3回/週で、7教科  
/セメスターなので、7×  
3=21回/週(=14コマ/  
週)。

バイトは、1回が4~5  
時間、週に5回。

「学費値上げに反対し、  
教育予算を上げるキャン  
ペーンで忙しいなあ」「プ  
ライベート:あるよ☆」

節約生活のコツ=「ご  
飯は友達と一緒に食べよ  
う!!」「部屋は友達と同居  
が一番!!」

# ■ロラの家

## まだ解決していない

## 「慰安婦」

## 問題

ツアアの4日目には、私たちは「ロラの家」を訪問し、元「慰安婦」が日本軍によってどんな被害を受け、そして今はどんな状況にあるのか、お話しを伺いました。

元「慰安慰安婦」らによる「リラ・フィリピーナ」の活動の場であるとともに、ロラたちの憩いの場でもありました。

「ロラ」とは、フィリ

### 「従軍慰安婦」って？

国連人権委員会対女性暴力特別報告者のラディカ・クワラスミ氏の報告によれば、日本帝国軍は1932年から1945年の間、軍の性奴隷として利用するため、口実を設けあるいは誘拐して、植民地や占領地の女性を組織的に強制動員す

る政策を実施しました。これらの大部分の女性は、11歳から20歳の若年の女兒でした。この政策の目的は、兵士の士気を高めその心理的安定をはかり、かつ性病の感染から彼らを守るとともに村落への軍事的攻撃の際に広範に行われた略奪お

よび強姦を防止するところがありました。慰安婦政策によって被害を受けた女性の数は10万から25万人に及ぶとされています。

90年代に韓国の女性が元「慰安婦」として名乗りを

あげたのを契機に、韓国やフィリピンなどの元「慰安婦」たちが日本政府に対し



「ロラ」のヒラリアさん

て謝罪と補償を求める裁判を日本で起こしました。しかし、「補償問題はサンフランシスコ講和条約、及びその他の2国間条約によって全て解決済みである」という政府の主張がほぼ全面的に認められ、裁判は全て敗訴となりました。

しかし、世論の高まりもあって、日本政府は1991年に「慰安婦」問題に関して調査を行いました。その調査結果を受け、1995年日本政府は正式に日本の軍事政策として「慰安婦」政策が行われたことを認め、謝罪しました。そして、一人200万円のお見舞金を支払い、民間の基金による「アジア女

性基金」を設立しました。これに対しては、元「慰安婦」だけではなく、国連人権委員会からも不十分で不当なものであるとする見解が発表されました。日本政府は上記によって「慰安婦」問題は解決されたものとなりましたが、現在においても元「慰安婦」たちは謝罪と補償を求めて運動を続けています。国連人権委員会においても審議は続けられています。また、2000年にはNGOなどにより東京で女性国際戦犯法廷も開かれました。

## 「ロラ・フィリピーナ」の活動と見解

ロラの証言を聞いた後、

私たちは「ロラ・フィリピーナ」代表者のリチルダさんから、「慰安婦」問題全体についてお話を伺いま

した。「ロラ・フィリピーナ」とは、フィリピンにおける強姦、性奴隷被害女性の生存者と女性の権利を擁護す

私はマニラのマラテ地区で生まれ育ちました。9人家族で、父は役人でした。

日本軍の占領が始まると、父は職を失い、兄と靴磨きやたばこ、米・通行パス（日本軍が発行したものでこれがないと、マニラの街を通行できない）の転売などをして、家族を養いました。

やがて、マニラで生活ができなくなり、父の出身であるパンパンガ州に引っ越しました。生活は相変わらず厳しかったため、父とバターンに行つて収穫の終わった田んぼに落ちている米を拾つてまわりました。

建物の2階に無理やり連れていかれました。そこには、4つの部屋があつて、それぞれの部屋に一人ずつ女性がいました。そこで初めて、レイプされました。

建物の周りにはフェンスが張つてあつて逃げられないようにされていました。周囲には日本兵がたくさんいました。

それから、毎晩少なくとも3〜4人の男性にレイプされました。抵抗すれば激しい暴行を受け、逃げようとしても兵士の監視が厳しく、泣くこと

しかできませんでした。新鮮な空気が吸えるのは、朝の洗濯と料理の間だけでした。

米軍の爆撃の時に逃げ出すことができませんでした。家族は私が死んだものと思つていたので、再会したときは大変驚かれました。「慰安婦」であったことは、余りにも恥ずかしい経験なので、母親にしか話せませんでした。

フィリピン政府は「慰安婦」（の要求）を認め、救済しようとしません。



上. 「慰安所」内部（寝るだけの場所しかない）  
下. 上海にあった「慰安所」の入り口

るために、1994年5月の創設された組織です。戦時性奴隷制度という戦争犯罪に対して日本政府に公式謝罪と法的個人補償を求める要求のために活動を続けています。

「ロフ」の存在

日本の侵略の結果

戦争の本当の姿

現在の社会での女性の

地位

「慰安婦」問題を通して侵略が何なのかを伝えていきたいと思います。戦争はいつも女性や子供を傷つけます。「慰安婦」は戦争によって生み出された被害者です。

また、「慰安婦」の存在や、彼女たちが性奴隷制度の被害者であることを認めようとする社会の反応は、そのまま社会が女性をどのように扱っているのかを如実に示しているのです。

『第二の『慰安婦』を生み

出さない！ 次の世代に戦争を生み出さない！！」  
闘う理由

補償は要求の中では、小さな部分、補償以外の部分が重要なのに、日本人や日本のメディアはそれを見ようとしません。

「リラ・フィリピーナ」の5つの要求

▼日本政府に対して

①「慰安婦」に関する全ての情報を開示する責任を果たす事

②「慰安婦」とその家族に対して適切な補償を行う事

③教科書、特に歴史教科書において、「慰安婦」政策について記述する事

④武力と暴力をもって「慰安婦」政策が進められたことを認め公式文書に残す事

⑤「慰安婦」とされた全てのフィリピン女性だけ

Q. もし補償がなされれば、活動をやめるのですか？

A. 補償は事実の認定に過ぎません。性的暴力・嫌がらせが絶えない限り、この闘いは続けられます。

Q. 「慰安婦」問題に対する日本人の反応はどう思いますか？

A. 日本政府の対応は不誠実ですが、多くの日本人は私たちの活動の主旨を理解し応援してくれています。大変心強くはあるが、それぞれの運動がそれぞれバラバラに行われており、うまく組織化されていない様に思います。

「慰安婦」問題を学校で教えたがために、先生が教育委員会から処分されたというニュースを聞き、ショックを受けました。

Q. 昨今の日本の自衛隊の動きをどう思いますか？

A. 「自衛」は否定しませんが、他の国を再び侵略することは絶対に許せません。日本の国民は朝鮮民主主義人民共和国の脅威を恐れるが、それはアメリカなどによるプロパガンダではないか。侵略戦争を進めてきたのは今も昔もアメリカなどの先進国です。日本は広島や長崎、ロラたちから戦



争の愚かさを学ばなければなりません。

また、国連の委員会での責任を追及されている「慰安婦」問題を解決せずに、日本が常任理事国入りするのはおかしいと思います。

## みんなでディスカッション

でなく、全てのアジア女性とその家族に対して謝罪する事

▼フィリピン政府に対して

①「慰安婦」問題にする政府の姿勢を明確に示す事

②「慰安婦」問題に関する調査・情報収集を行う事

③「慰安婦」の存在をフィ

## 元慰安婦裁判一敗訴の比人元慰安婦2人、「せめて被害事実を認定してほしい」と涙の訴え

フィリピン人元慰安婦損害賠償請求訴訟で日本の最高裁が慰安婦側の原告を棄却したことを受け、原告の比人女性2人がケソン市で27日、マニラ新聞の単独取材に応じ初めてその心情を吐露した。彼女らは、1992年に名乗り出て以来、11年間にわたり日本政府による事実認定と補償を求め裁判闘争を続けてきたが、今回の棄却で司法救済の道を絶たれた。最高裁が口頭弁論を開かず門前払いしたことについて「私たちの証言を聞きせめて性的暴力を受けたという事実を認定してほしい」と涙ながらに語った。

2人はリサール州アンティポロに住むピラル・フリヤスさん(77)とマニラ市ナボタスに住むオルテンシア・マルティネスさん(76)。両人とも、92年に比で初めて慰安婦被害を名乗り出た故マリア・ロサ・ヘンソンさん=97年に死亡=の存在をテレビとラジオで知りすぐに支援団体に被害を名乗り出た。93年に東京地方裁判所に損害賠償を求めて提訴した46人の原告団に加わった。2人とも裁判傍聴や集会参加などのために訪日したことがある。

2人は最高裁決定の翌日26日に国内テレビ報道で棄却を初めて知ったという。フリヤスさんは「ニュースを聞いて心臓が張り裂けそうな気持ちになった。これまでの十年以上の闘いは一体何だったのかと虚しい思いに駆られた」と気持ちを吐露した。さらに「自分を陵辱した日本兵を見つけだし復讐したいという気持ちは今も変わらない。15歳で被害を受けて以降、年月が経つにつれ心の傷はますます深くなる一方だ。今回の最高裁決定でさらに傷口が広がった」と訴えた。

一方、マルティネスさんは「アロヨ大統領は(アジア女性基金の福祉支援で比側窓口となった)社会福祉省の長官時代から慰安婦問題を熟知している。この問題を日本政府に伝えたり、支援すると私たちに何度も約束したが一度も実行したことがない」と慰安婦問題に対する現政権の無策ぶりを批判した。

2人とも途中から涙があふれ出て来たため、ハンカチで何度も目頭を拭いていた。フリヤスさんが「賠償は無理でも、せめて私たちの証言に耳を傾け、被害者として事実認定してほしい」と話すと、マルティネスさんも深くうなずいた。

気管支肺炎やリュウマチを患っているマルティネスさん。「個人に

国を訴える権利がないのならこれから一体どうしたらいいのか」。大きくため息をついた。

今回の最高裁の比人元慰安婦賠償請求訴訟に対する決定は、今年3月25日の韓国人元慰安婦を原告とする閔釜裁判、同28日の在日韓国人元「慰安婦」裁判の原告審に対する最高裁決定と同じ内容で、慰安婦訴訟の原告側の訴えをいずれも門前払いするものだった。

閔釜裁判では山口地裁下関支部が1998年に「立法不作為による人権侵害」を認め賠償金の支払いを国に命じたが、その後の高裁、最高裁では認められなかった。比人慰安婦訴訟でも弁護団が従来の国際人権法論議を中心に、高裁からは新たにトラウマなど「立法不作為による人権侵害」も争点に加えたが、最高裁は法廷審理も開かず、原告から三年後に訴えを棄却した。

韓国人慰安婦たちの提訴に次いで比人慰安婦たち原告46人が93年に東京地裁に提訴して十年。日比の支援者や弁護団、韓国人や中国人たちの被害者らの横のつながりも交えて法廷外でも補償請求運動を続けた。この動きを受けて参議院に民主、共産、社民党の共同提案で「戦時的強制被害者問題の解決の促進に関する法律案」が02年に提出されたが、会期切れで廃案となっている。

このような逆風にもかかわらず、原告らは国際社会への訴えかけを継続してきた。国連の人権小委員会や社会権規約委員会なども相次いでこの問題を取り上げて独自に調査するなどし、日本政府に対し補償など解決に乗り出すよう勧告を出している。

また、フィリピンでは最近、慰安婦の記述を教科書に掲載するよう求めるなど歴史認識への取り組みも始まった。マニラ市とも協力し今年4月には慰安婦被害を刻んだ記念碑を同市内に建立している。日本の司法による救済の道を閉ざされた原告らは今後、国際社会への働きかけを一層強めるとともに、フィリピンや日本の教育現場で慰安婦問題を伝えていく地道な運動も継続していくことになるだろう。補償問題は国民基金で解決済みと主張する日本政府も裁判所まかせでない取り組みが今後求められるであろう。(以下、略)

【まにら新聞 03年12月29日】

### 「ロラの家」を訪問しての感想

「慰安婦」問題は決して古い問題ではなく、極めて今日的な問題だと思えました。日本では自衛隊の「軍隊化」の動きが進んでいます。戦争ができる「普通の」国になるうというのがその根拠ですが、こういった動きがある中で、政府が過去の戦争にどう向き合っているかを知る事はとても重要な事ではないかと思えます。「ロラの家」で伺った話や「正義」の戦争の名の下に沢山の一般市民が犠牲になり、今も混乱

Y)

④ 歴史の風化を防ぐために、「慰安婦」を含めた第2次世界大戦の全ての犠牲者の慰霊碑と聖

堂を建てる事  
⑤ 「慰安婦」と、残された家族に対して生活補助を行う事

# 9月4日 赤線街をフィードバック

9月4日の午後LFSからの突然の提案で夜に赤線街を訪問すること

なった。赤線街とは売買春街のことで、若い女の子たちがいわゆる夜の仕

事をしている通りだ。行って何をやるのだからという疑問に、LFS



のアナは「私たちよりも若い女の子達がたくさん夜に働いているから、直接にインタビューとかしてみればいいよ。」と答えた。わたしの不安な気持ちを気遣ってくれているのか、「大丈夫トライしてみよう！」と元気に言った。

それから夜まで行って何を聞いたらいいのだろうと、とても不安な時間が流れた。

夜10時過ぎから2時間、私たちは5人グループを作ってこの通りを巡った。

通りの両脇にお店が並び、店の前では女の子達が客引きをしてにぎやかな通りだった。いわゆる

「物乞い」をする子どもたちも、普通の通りより目立って多く、お店の入り口付近で店から出てくるお客を遊びながら待っていた。

警官がお店の入り口で子ども達を追っ払っていたのをよく見かけたが、子ども達にはそれも面白いようで警官に近づいては逃げて遊んでいるようだった。

お店の看板には「いらっしやいませ」「welcome」あと中国語、ハンゲルも書かれていた。

5〜6人の韓国人がお店から出てきた。何かすごく楽しいようで大声で笑っていたが、入り口でお金をねだる子どもを払

イザさん (23歳・ゲイ)

実家はサマール島にあって、8人兄弟で3男5女。家がとても貧しかったので働く必要があった。高校は4年目まで行っただけで卒業はしていない。

7歳から15歳の間自分の性別が分からなくて混乱していたが、15歳の時にはつきりと女性であることを自覚し、ドレスを着始め女性として生きるようになった。両親はゲイであることはいいが、女の格好はしないでという。

以前はマニラに住んでいたが、ここではもう3年ほど働いている。お客は、ゲイ・ヘテロ・バイセクシュアルといて、外国ではゲイのお店が少ないそうなのでここではゲイのお店は人気がある。

1日にお客は1人か2人で最低500ペソくらい稼げて、多いときは1500ペソ稼げる時もある。

市長が発行している商売のエンターテイナーとしての許可証を持っていて、これを持っていればお客がつきやすいし、給料も比較的好い。この許可証は1年に1回更新が必要で300ペソかかる。

ロエナ・トレドさん (22歳・女性)

以前はマニラにいたが、お金を稼ぐため1ヶ月ほど前にココアンヘレス市に引っ越してきた。大体、夕方17時から深夜2時まで働いている。

お客は、アメリカ・韓国・オーストラリア・イギリス・フィリピンの人でアメリカからのお客が一番多い。日本人は少ないと話していたが、彼女のお店の看板にも「いらっしゃいませ」という字を見ることが出来た。

このお店ではお客がつかなくても1日200ペソ(ちなみにアンヘレス市の最低賃金は275ペソ)が給料として支払われるが、お客がつかないと全く給料が出ないお店もある。

自分のお客がお店でお酒などを飲むと、給料がよくなる。またお客が直接くれたお金はそのうち60%を自分のものとし、40%はお店のママさんに渡すようになっている。

人それぞれだがこの仕事は大体29歳くらいまでで、それ以降は働いたとしても給料がすごく安くなってしまう。中には年をとってもお店のママさんとしてやっていける人もいる。

いのけて、また次のお店に入ってしまった。

日本でも売買取春街に行ったことのない私は、そんな生まれて初めて見るような異質な空間の中を不安に思いながらただ歩いていった。2時間のうちに私たちは2人の方にインタビューした。

写真に、お店の入り口で客引きをしている女の子が写っている。12〜13歳ぐらいの女の子が2人でお店に入ってもらおうとかがみついている。

売春をやっていると普通の精神状態ではいられなくなるのはある意味当然で、薬をやっている子が多いとか。「警察官をどう思う？」と質問したら、警察官もお客だよ(笑)ということも聞いた。(A・K)

# ■フィリピン労働運動の現場訪問記 豊かさの足下にあるもの



サウテックでのピケ (9/8に訪問)

フィリピンの法定最低賃金は、地域差はあるが、マニラの日給で280ペソ(約560円)。おかしなことだが、政府発表では589ペソが必要とされているようだ。

労働者は人口の23%程度で、この内8%が比較的裕福な上層の労働者で15%が下層労働者。残りの2%が資本家や大地主で、75%が小作階級に分類される。小作農の中には国連の貧困ライン以下の生活(一日1ドル以下の生活)を強いられる人も少ない。

失業率は11%が公式発表だが、求職中の労働者を含めれば50%とも言われている。

数値的に一瞥しただけで、フィリピンの労働者が置かれている状況が過酷なものであることが判断出来る。

政府発表よりも最低賃金の方が低いということは、最低賃金ではやって行けないことを示すが、それでも法的な根拠付けとしての最低賃金が設定されている以上、労働者の生活水準はかなり厳しいものになる。しかも、失業率の高さはそれだけ経営側に有利な、すなわち低賃金でも労働者を雇うことが可能な社会的条件を経営側に与えている、ということを意味する。資本家の気に入らない労働者は即座に解雇されるような「君の他はいくらでもいる」

と資本家に言わせる、労働者が紙くずのように扱われる状況が、フィリピンの労働者を取り巻く現状だ。(近年の日本もだが)

そして、この条件下で多くの多国籍資本がフィリピン国内で工場を運営し、安価な労働力で利益を得ている。今、日本は不況である

- 法廷最低賃金  
280ペソ (マニラ)
- 政府発表の最低生活費  
589ペソ

→法定賃金でも生活できない!

が、それでもかなり豊かな状況であることには変わりない。

この富が、一体どこから来るのか？ その問いの答えの一つがフィリピンにある。

私たちが出会ったのは、まさにこの世界的な経済

的・社会的下層の労働者たちだ。

## 2日目 9/1

### サン・ミゲルのピケを訪問して

フィリピン到着から2日目。残念ながら天気はあまり良くなかったが、私は夕方からマニラ市内のサン・ミゲルの倉庫前でピケット・ラインを張る労働者を訪れ、豪雨の中で話を伺った。

ことだ。私達が訪れた場所以外にも2箇所、計3箇所の事業所・倉庫の閉鎖が決定されている。この発表の同日、本社前でのピケ・抗議行動が取り組まれ、現在にいたっている。

沈黙化を狙っている。しかし、ピケに参加している労働者は言う。「私達は補償金が欲しいのではなく、仕事が欲しいのだ。」

サン・ミゲルはフィリピンの最も大きな資本の一つで、ビールや各種飲料、食品などを製造している。フィリピンと聞いて、「サン・ミゲルのビール」と答える人も少なくないだろう。

閉鎖の理由は経費削減一競争の激化による労働者の解雇。この暴挙によって、191人の正規労働者が解雇され、これに対し、労働者は倉庫前でピケを張り、1億5千ペソ分（！）の商品が経営者の手に渡るのを防ぎ、抗議行動を展開している。

ピケを張る労働者は記者会見などを開いて、広く問題を知らせていこうとしたりもしたが、マスコミは一切報道してくれなかったようだ。一方で、政府がこのピケに対して「関連会社へも被害が出て、フィリピン経済に打撃を与えている」という批判をたれ流した。

労働者の話によると、6月12日に経営者が50人のガードマン、20人の警察を引き連れて、倉庫を閉鎖すると突然の発表した、との

こうした突然の解雇はフィリピンの労働法でも違法とされており、経営側は補償金を出すことを妥協点とし、ピケの解除と問題の

労働省・雇用局の姿勢は、ピケは認めるものの、会社側にはピケを潰す権利があり、また他の労働者がピケに加わることを許さない、といったもの。これで



サン・ミゲルでのレクチャー

は、「ピケは認めない」と言っているのと同じことだろ。

しかも、経営側の本当の目的は、事業所・倉庫の閉鎖ではなく、「コストのかかる」正規労働者を解雇し、代わりに低賃金の契約労働者を雇いなおすことのようにだ。労働者は、こうした一方的な経営側の解雇計画に抗し、また資本家の利益を擁護する政府ともたたかっ

ているのだ。

私達がこうした話を聞いてみると、徐々に若者がピケのテントに集まってきた。寡黙で落ち着いた雰囲気、労働者とは対照的な、明るく元気な若者達だ。私達、日本からの訪問者が珍しかったのか、向こうから積極的に話しはじめ、そのまま交流会となってしまった。

話を聞くと、彼らは学生で、ピケの支援に来たのだという。激しい雨が降りしきる中、10名ほどの若者が、しかも学制が日本とは違うため、17歳という若者までがピケに足を運び、そのまま一夜を労働者とともに過ごすのだという。あまりに過ごすのだという。あまりにキヤーカー騒ぐ元気がすぎる学生達で、厳しい状況下で深刻に現状を語る労働者と比較するととても信

じられず、「本当に？」と聞くとむしろそんな質問が不思議かのように、「そうだよ」と答える。どうやら本気らしい。労働者のたたかいに学生が支援・連帯する！この運動でもっとも原則的なたたかいが、フィリピンではしっかりと根付いており、しかもこんなに元気だとは。正直、色んな意味でショックを受けた。



支援の学生たち

9日目 9/8

## 南部タガログで労働運動センターを訪問

フィリピン滞在9日目、私達は南部タガログ・ラグナ地区の日系企業で働く労働者たちと交流した。

まず、最初にCWELD（労働者の教育とリーダーシップ開発のためのセンター）を訪れ、労働者から日系企業での労働環境などを聞いた。私達を迎えてくれたのは以下の企業の労働者達だ。

【サン・エヴァー・ライツ】タイヨーパッキンの子会社、富士通ハードディスクの部品を製造。

【ニッシン・ブレーキ】日信工業の子会社。ホンダ車等のブレーキ部品などを製造。【マスタ・フィリピンズ】増田製作所のフィリピン工場。ホンダ車等のエンジン部品を製造。【TSTテック・フィ

リピン】TSTのフィリピン工場。ホンダ車等の座席部品を製造。

ラグナ地区には6ヶ所の工業団地（特別輸出加工区）があり、フィリピン政府は「賃金が低く、組合がない」を売りに、ラグナ地区へ多国籍資本を呼び込んでいる。そのため、組合の設立や活動に対する弾圧は

厳しいものとなる。労使交渉の決裂→ストライキ突入の時には、警察・軍が介入して労働者は「テロリスト」のごとく扱われ、スト潰しが行われることもあるという。

労働条件は一律に厳しい。サン・エヴァー・ライツでは、作業中の私語が禁じられ、その規則を破ると監督官から暴行を受ける

こともある。トイレには、通常カギがかけられており、3分しかない1日4回のトイレ・タイム以外に使用することが出来ない。昼食は30分しかない。生産力を維持するために、細かな規定が労働者を縛り付けているのだ。さらに8時間の労働の後に6時間の残業が強制させられる時もあると言う。その結果として家族

との団結が奪われるばかりか組合の会議・学習がままならないので、実質的な組合つぶしが行われているに等しい。

この地区での最低賃金は237ペソとマニラと比べれば50ペソ近くも低い。しかし、労働組合を作り労使交渉を行えば、300ペソぐらいいまで賃金が上がり、医療保険にも入ることが出来る。組合設立・活動は労働者にとって深刻な問題であり、しかし、資本にとつては厄介モノ以外の何物でもない。例えば、ラ



サン・エヴァー・ライツでつくるHDDの部品

グナ・テクノ工業団地には組合のある企業は13しかなく、89もの組合のない企業が存在している。それほど、組合を作り、維持していくことは困難だということだ。CWELDは、こうした厳しい状況の中で、契約労働者も含めて組織化を行うための場所なのだ。

「マスダ・フィリピンズでは露骨な組合つぶしが行われている」と労働者は語る。「団結した労働者の鎖」と命名された組合は、いったんは雇用局から認められたものの、それから2週間足らずで会社側からの認可取り消し要請によって、組合としての認可を取り消された。

労働者は抗議のために雇用局の地方事務所前でピケを張ったが、今度はそれを理由に組合役員が会社側から解雇された。次に、組合は昼休みにノイズ・バラッジと言われる大声で騒ぎたてる抗議を行ったが、それを理由に74名が解雇された。会社側はその後、600人の契約社員を雇い入れたという。

現在は、抗議によって雇用局が74人の解雇を取り消すように勧告したが、会社側は受け入れていない、とのことだ。

新たに雇われた契約労働者の状況も過酷で、今年の7月2日には残業続きの上に28時間労働の重労働を担わされた契約労働者が過

労死したという事件もあった。しかも、会社側はその労働者が社内です倒れた時、問題となることを恐れてすぐさま病院に連れて行かず、自然回復させようとした結果として、労働者を殺したのだ。契約労働者などで補償もなく、申し立てする手段もないというのだ。

TSテックでは、組合を設立したら、経営者が会社をTSテックとTSストリームに分割し、TSテックを操業停止にした上でTSストリームに操業を移行。結果、組合が出来てもストリームにはないので、組合は認められなくなった。TSテックの労働者は、経営側はいつも「組合を作ったら操業をやめる」と

言っていると語った。この手法もまた、組合つぶしの方法の一つだという。

労働者を日本に送る「研修員制度」も組合つぶしの手法の一つだという。積極的に組合活動に参加している労働者を日本に送り、フィリピン国内での組合活動を妨害する目的で行なわれている、のだと。この研修はまた、仕事の「優秀な」資本に従順な労働者を組合活動から隔離し、労働者を団結させないようにするために用いられている。ある労働者は、「日本に研修に行った際、どのような労働者の権利があるのかわからず、いようにされてしまう。」とその悪辣なやり方を語った。

9日目  
9/8

### 南部タガログで3カ所のピケに行く

CWELDでのレクチャー、交流の後、私達は3ヶ所のピケを訪問した。

最初に赴いたのは、メリジャン工業団地にあるサウテックだ。工業団地入り口

ではサウテックのピケが張られていた。サウテックは資本こそフィリピンだが、

ここで製造された部品がトヨタやスズキといった日本の自動車メーカーへ納入さ



カーパーツの労働者と記念写真

彼は「せめて最賃ぐらいは欲しい」と語っていた。特別輸出加工区という地域が、いかに無法地帯で労働者の血をすすり取る場所かということが良くわかる。

次に私達は日産フライピン工場前でのピケを訪れた。残念ながら、この日はピケに参加している労働者達がマニラでの会議に出席

していたため、ピケには誰もいないという状況であった。同行してくれたコデーネーターによれば、このピケは10月1日である

3年にも及ぶという。長い年月の中で、再就職してピケを辞めていく労働者もいるが、このピケからフルタイムの活動家になった労働者もいるとのことだ。

最後に私達はカーパーツのピケを訪れた。カーパーツもサウテックと同様、日本の自動車企業に部品を納入しているフライピン資本

だ。ここでは違法な工場閉鎖が強行され、140人が解雇されたという。会社側

は補償金として勤務1年につき15日分の給料を払うとし、65人がそれを受け取ったものの、75人が復職を求めて8月2日からピケに立ち上がったという。工場の中をチラリと見ると、4〜5人の銃を携帯したガードマンが、こちらの様子を窺っていた。

労働者は「ここで10年以上勤めてきた。いまさら転職なんて出来ない」と語り、要求が通るまでピケを貫き通す覚悟を語ってくれた。

私達が訪れたとき、このピケでのリーダーが雇用局のヒアリングに向いているため不在であった。仕方なく、労働者から一通りの状況を聞いて帰ろうとしたら、「リーダーが帰るまで飯食って待って」と言われる。さすがにピケでの貴重な食料をいただくわけにはいかない、と思い帰ろうとしたが、「いーからいー

から」的なノリでそのままその場で夕食を取りながらの交流になった。

交流では様々な話を聞くことが出来た。ピケの前を通りかかる人がカンパしてくれたり、近くの農家から米の支援を得たりしているとか、そうしたピケの状況説明から、労働者のたまたかう意味についてなど。ある若い労働者は、「私たち労働者が都市部でたいたい、そしてゲリラ勢力が農村部でたたかうことで、社会を変える、革命を可能にするんだ！」と熱く語ってくれた。

そうこうしているうちに、リーダーが戻ってきた。ピケに参加している労働者の中ではかなり恰幅のある人物だ。「オヤビンっ！」という感じ。状況については他の労働者から話を聞いていたので、リーダーとは軽い挨拶を交わし、ツアー団からの連帯メッセージを伝える。すると労働者から「何か歌をうたってくれ」との要求がきた。別に何も用意しなかったもので、何となくその場で「翼をくだ

れており、決して日本と無関係の資本ではない。労働者によれば、このサウテックでは工場の移転に伴い組合員の全て、100人以上が解雇され、それに抗議のピケが張られているという。

私達はまた、メリジャン工業団地にある別の企

業で働く契約労働者からも話を聞くことが出来た。彼は韓国系の企業で技師として働いており、その日給は1日200ペソ（初任給は180）、なんと最低賃金以下だという。そして、1

日の交通費が100ペソほどかかるため、手元に残るのは100ペソしかない。

さい」を熱唱した。歌い終わり、労働者から拍手を受けていると、その拍手が終わらないうちにフィリピン流のシュプレヒ・コールが突如始まった。これは文章で説明するのは難しいが、とにかくフィリピンのシュプレヒ・コールはカッコイイのだ！ 残念ながら、現地の言葉なので何を言っているかわからないが、それでも熱気がこもり相当かつこい。最後に、労働者たちと熱い握手を交わし、私たちは帰路についた。

ヒケのリーダー！



## 交流を終えて、私の胸を去来するもの

たたかう労働者はカッコイイと思う。キムタクやペ様なんて足下にも及ばない。見た目は単なるおっさん達だが、信念を貫いてたたかうおっさん達の目は熱く燃えている。そうしたおっさん達が大きな声でシュプレヒ・コールをあげ、「俺達は絶対に負けない！」とばかりに気合を入れている姿には、心底から身震いした。

もちろん、こんな適当なことを言っていてもしようがない。彼らの困窮状況は、多国籍資本やその傘下の資本による激烈な収奪にその原因があり、日本の私達はその収奪による富の蓄積の上であぐらをかいているような状況なのだから。いくら日本が不況で苦しい状況だ、と言ってもフィリピンと比べるまでもない。むしろ、日本の不況

が「この程度」（自殺者が3万人を越す、という状況だが）に済んでいるのは、フィリピンにおける収奪の強化があるからに他ならない。この背景のなかで、フィリピンの労働者は立ち上がっているのだから。

CWELDでは激布の交換をした。CWELDから受け取った激布には「万国の労働者よ、団結せよ！」というマルクスの、労働運動の「古典的な」スローガンが力強く書かれていた。熱く革命を語った若き労働者を思い出す。

日本の人は言うかもしれない。「日本の30年前の状況だね」と。しかし、それでは30年後にフィリピンは違う状況になっているのだろうか？ 日本のように経済的に成長してきているだろうか？ 私が見てきた限り、その可能性

は限りなくゼロに近い。確かに、マニラ中心部は都市化され、また経済力も数字的に見れば漸次に上昇しているかもしれない。しかし、それが何によって引き起こされているのか、という問題を抜きに語ることは出来ない。農民の生活を破壊し、先住民族の生活を破壊し、そうして形成される圧倒的な貧困層としての労働者。こうした労働者を、多国籍資本が特別輸出加工区という「エサ場」を利用して、収奪し続けている。何よりも、富の蓄積—収奪の関係が変わらない限り、収奪される側が発展することはそうそうあり得ない話だ。「資本主義が世界を豊かにする」、なんて百年前にも言われていた。百年も騙されればもう十分だ。豊かになったのは世界人口の2割だけである。

「グローバル化は貧困の拡大を促進する」という言葉の実体がここにある。それではフィリピンの状況はいかにして変えられるのか？ フィリピンの労働者のたたかいによってであろうか？ そうではない。CWELDから託された激布の意味は、日本が変わらなければフィリピンも変わらない、という意味に他ならない。フィリピンの労働者と国境を越えて団結する日本の労働者を求める、ということに他ならない。「日本の豊かさ」の根本にある、労働者たちの悲痛なよびかけに、日本の労働者がいかに応えるか、この困難な課題に日本の労働者は直面しているし、応えなければならぬ、というのがツアーを終えた私の胸に去来した。(CHONONO)

「グローバル化は貧困の拡大を促進する」という言葉の実体がここにある。それではフィリピンの状況はいかにして変えられるのか？ フィリピンの労働者のたたかいによってであろうか？ そうではない。CWELDから託された激布の意味は、日本が変わらなければフィリピンも変わらない、という意味に他ならない。フィリピンの労働者と国境を越えて団結する日本の労働者を求める、ということに他ならない。「日本の豊かさ」の根本にある、労働者たちの悲痛なよびかけに、日本の労働者がいかに応えるか、この困難な課題に日本の労働者は直面しているし、応えなければならぬ、というのがツアーを終えた私の胸に去来した。(CHONONO)

## パヤタス 都市貧困地区コミュニティー

私の心に残ったのはパヤタスのゴミ山である。

ここにはゴミの中から金目のものを拾って生活している人がいる。彼らは土地の所有権をもたないために不法占拠者とみなされている。職業訓練などがなされ

ていないため、まともな仕事に就けず、また、ゴミ山のすぐ近くに住んでいるために健康面でも被害が出ているようだ。

私は最下層といわれる人々の生活状況を垣間見た。

たくさん家が立ち並んでいて、家の隙間の細い道をしばらく歩いていくと、ゴミの山が見えてきました。もちろん道にもゴミが：たくさん：。



# ■米軍基地跡地と住民たちの苦悩 クラーク基地跡を訪れて



クラーク基地の汚染被害地区

今回、私たちはツアー期間のうち3日間をパンパンガ州アンヘレスで過ごすことになりました。その目的は約百年間にわたってこのアンヘレスに駐留してきたアメリカ軍が、この地域の人々にどのような影響を与えてきたのかを知るためでした。

## クラーク基地の歴史と現在

アンヘレス市には、1900年米国の植民地支配開始以降、クラーク米軍基地が存在してきました。フィリピンにあった主要な米軍基地は、アジア最大規模といわれたこのクラーク米航空基地とオロンガポ市にある海軍基地でした。いずれの基地も1991年フィリピン上院による比米基地協定の破棄によって撤去されていま

基地の撤去以降、フィリピン政府は跡地を経済特別区域として、外国企業の誘致と観光施設整備を進めています。韓国や台湾、ドイツなどの企業とともに日本企業も進出しており、横浜タイヤの工場が見えました。またエクスポ・フィリピンという大規模な遊園地やゴルフコース、カジノなどがつくられています。

このアンヘレス市の西

部にはピナトゥボ火山があり、1991年大規模な噴火が起こりました。この噴火によって舞い上がった火山灰のためにこの年は地球の日照時間が短くなったといわれるほど大規模なものでした。周辺地域に堆積した火山灰は10m以上にもなり、これによって42万世帯、190万人が避難するなどの影響をうけ、9万人が家を失ったといわれています。さらにその後何年に



もわたって雨季には大規模な泥流が発生し、周辺地域を飲み込んでいきました。

今回、私たちが訪れたコミュニティの人々もこのピナトゥボ火山の噴火によって避難を余儀なくされた人たちでした。政府・行政は広大な敷地をもつク

## 基地による汚染と住民被害の実態

実は同じころ1992年に米国政府の会計検査院(GAO)が在外米軍による環境汚染の実態報告のなかで、フィリピンに駐留していた米軍が燃料や化学物

ラーク基地内に避難所をつくり、2万世帯がここで数年間を過ごすことになりました。問題はそこでおこりました。住民のなかで流産や「障害」を持った子ども

質を地面に捨てていたという

これら有毒物質が井戸水を通して住民たちの体を蝕んでいたので。しかし、その後も数年にわたって住

民たちはそこに住みつづけることになったのです。その後、事態が深刻となつてから行政は再定住地を用意し、避難民たちはこのコミュニティに移動してきました。

クラーク基地での汚染被害については、先にあ

げた米国会計検査院の報告をはじめ世界保健機関(WHO)など10以上の公的な報告がなされているそうです。フィリピン政府の調査でもクラーク基地跡地の避難所では、井戸水を飲んだ避難民が腹痛や皮膚疾患を訴え、500家族を調査したところ、井戸水の汚染が原因と思われる病気で2000年までに76人が死

ちが米国とフィリピン政府

賠償裁判で原告は「被害は2000人以上、約140人が死亡した」としています。

また基地跡地の土壌調査では、アスベスト、ベンゼン、クロム、ダイオキシン、鉛、PCB、トリクロロエチレンが検出されており、また訴えられている障害や症状とこれらの汚染物質が人体に与える影響が一致していることが確認されています。

被害については、先にあ

### 用語解説

【アスベスト】 繊維状鉱物の総称。防火・保温、電気の絶縁物などに用いる。吸い込むと肺癌の原因となる。

【ベンゼン】 芳香のある無色揮発性の液体。医薬・染料・香料・爆薬などの合成原料。蒸気を吸入すると有害。

【クロム】 耐食性が強く、めっき用・合金材料として用いられる。皮膚・呼吸器粘膜の腐蝕・潰瘍などの障害であるクロム中毒を引きおこす。

【ダイオキシン】 毒性が強く分解されにくい化合物。皮膚・内臓障害を起こし、催奇形性・発癌性があるものが少ない。都市のごみ焼却の灰、製紙の汚泥、自動車の排ガス中に見出される。

【鉛】 鉛とその化合物の中毒による健康被害である鉛害を引きおこす。

【PCB】 絶縁油・熱媒体・可塑剤などに広く用いられたが、毒性および化学的安定性による人体蓄積・廃棄処理難のため、日本では1972年から製造・使用禁止。

【トリクロロエチレン】 無色でクロロホルム臭がある。不燃性で有毒。ドライクリーニングや半導体工場での洗浄に用いられる。

## クラーク基地跡の現状と課題

住民が起こした訴訟は2001年に棄却されています。いまにいたるまで米政府もフィリピン政府も何の補償も行っていない、というのは驚くべきことです。こんなことが許されているのでしょうか。

米政府の主張は「比米基地協定には米軍に汚染除去の費用負担の責任を規定した条項がない」というこ

とだそうです。実はこれは韓国や日本など、米国が取り結んでいるすべての軍事協定に共通する問題です。さらに問題なのは「環境上の人種差別」とも指摘される米政府の差別的な対応です。ドイツやカナダ、イ

タリア、日本などに駐留する米軍は不十分ながらも有害廃棄物汚染除去作業のために予算支出をしているの



汚染地域に残る井戸

## コミュニティーでお話を伺いました

### アンカルマちゃん

はじめにアンカルマちゃん(7)と母親に話を聞きました。

アンカルマちゃんは重度の脳性マヒと診断されています。歩くことはできず寝たきりの状態でした。固いものが食べられない。話せるのは「ダカール(たくさん)」という言葉だけ、ということでした。

母親は「子どもの面倒を見なければならぬので、仕事にいけないが、子育ての軍に怒りはないが、子育ての支援をしてほしい」と話してくれました。



### ケビンくん

ケビンくん(6)も脳性マヒと診断されています。ケビンくんは教会から寄付を受けたという歩行器具を使って立つことができません。突然の来客に少し興奮した様子で、ニコニコと迎えてくれました。表情が豊かで、3人の姉さん達とも仲が良さそうでした。

お母さんはケビンくんを生む前に地域の助産婦さんから汚染物質の影響があるから子どもを産むのは控えたほうが良い、といわれていたのですが信じずに妊娠し、死産した経験があると教えてくれました。ケビンくんには病院でのリハビリを受けさせていたそうです。費用が高く、いまは家でリハビリを真似てやっているということでした。



### ミッシェルさん

ミッシェルさん(13)は6人兄弟の末っ子。彼女も寝たきりです。

やはりお母さんがおっしゃっていたのは治療を受けるお金がない、ということでした。噴火前はドライバーだった父親も仕事をうしない、いまは植木蜂を自分で作って生計を立てているそうですが、物価の値上がりもあって生活は厳しく、食事の回数を減らしている、とおっしゃっていました。

に、フィリピンに対してはそれが全く支払われておらず、米軍の予算リストに名前すらあげられていないのです。まさにフィリピンを植民地としか見ていない米国の態度が現れています。もう一つはフィリピン政府の対応です。被害住民になんの補償もしないフィリピン政府は、しかしこの広大なクラーク基地の全体を整備するために大規模な予算を支出しています。ゴルフコースもカジノも、そして誘致される外国企業も、ピナトウボ火山によって住居と職を失った人々には無縁の存在です。こんな理不尽なことが何故おこっているのか？

その問いが強く思ううかんでくるごとに、「だからこそフィリピン社会を変えなくてはいけないんだ」という学生たちの話がまた強く胸に刻まれる思いがしました。(D・K)

# イスラム教徒のコミュニティー訪問記

フィリピンは一般的に「キリスト教国」といわれている。だが、ミンダナオ島、ビサヤ諸島にはムスリムも多く住んでいる。9月7日、私たちはマニラ市内にあるムスリムの居住地区へ行き、モスクで話を聞く



マニラ首都圏で2番目に大きなイスラムコミュニティー  
・かなり窮屈な印象

ことが出来た。  
9・11事件があつて以来、世界ではイスラム教徒は非難の目で見られることが多くなった。そしてそれはフィリピンも例外ではないのだ。

例えば、モスクの司祭の話では、就職するときにはイスラム教徒だというだけで不採用にされてしまうため、イスラム系の自分の名前を西洋風に変えて就職活動を行わなければならないという。また、パンパンガで出会ったモロ（ミンダナオ島のムスリムの諸民族）青年同盟の人は、殺人事件が起きたとき犯人がムスリムだった場合は、メディアで「イスラム教徒が殺した（個人名だけでなく）」と報道されると話した。  
「キリスト教徒をどう思

うか。」という質問には、「悪いのはキリスト教徒ではなく、メディアの報道の仕方だから、誰がどの宗教を信じるかというのもその人の自由だと思う。」と答えた。キリスト教徒とイスラム教徒が敵対しているわけではないのだ。

フィリピン政府もイスラム教の信仰を認めているが、大学の手続きに手間がかかるなど彼らへの偏見はまだあるようだ。

また、ミンダナオ島のモロの人々は、フィリピンからの独立を願っているという。政府軍と争っているMILF（モロイスラム解放戦線）はテロリストと認識をされることもあるが、彼らは自分たちの自由と独立のために戦っているだけである。日本の一部のメディアでMILFがテロリスト

だと紹介された事実を聞くと、彼はショックと怒りを感じていたようだ。メディアの情報がすべて正しいわけではないのだ。

この話を聞くと、フィリピンで少数派のムスリムは暮らしづらくなり、独立をしないと考えるのも無理はない。

実は私も彼らと話す前は、イスラム教徒がどのような人々なのかと不安に思っていたが、彼らは別に排他的な考えを持っていないわけではなかった（これ自体偏見なのだが）。

メディアを鵜呑みにしてキリスト教徒やイスラム教徒を一括りに捉えるのではなく、個人として仲良くできれば戦争も偏見もなくなるのだろう。（M・A）

ツアー 日常のフォトアルバム

フィリピンの食べ物



クラークでの食事。ご飯はお皿に丸々と盛りつけるのが、フィリピンでは一般的。



アイタ族の食事。バナナの葉でつくごく大きい！

フィリピンの日常の乗り物を撮ってみました



ジープの改造車タクシー、ジプニー



乗り合いバイクのトライシクル



乗り合ハタクシーの中はこんな感じ

ツアー参加者のプライベートフォト



この後かなりハイテンションだった。



像に話しかけるサブさん、かなりハイテンション。



通訳お疲れさまです。

# 少数民族アイタ族と交流して

ツアー第6日目、私たちは、アンヘレス市郊外にあるアイタ族のコミュニティーを訪問した。そこで彼らの生活や教育・医療面などの問題について、村で唯一の助産婦であり、村の観光組織のリーダーでもあるエンビラ・メンドウーサさんから話を聞いた。

フィリピンは、マレー系をはじめとした多くの民族から成り立っている複合社会である。

が、91年のピナツボ火山噴火後は、町の近くに村ごと引越したケースも多いらしい。

そのうちアイタ族は、マレー系のフィリピン人に比べると背が低く、黒い肌と天然パーマのかかった髪を持つ、ネグリート系の民族である。元々はルソン島西部のピナツボ山麓周辺の山岳地帯に多く生活していた

今回私たちが訪問した村は、アイタ族のうちマガンジャ種族の村だったが、比較的町に近く、電気も通っていた。彼らは、独自の宗教と言語を持つが、現在では、パンガ地域の主要言語で



元気いっぱいなアイタ族の女の子

あるパンパンガ語により近いものに変化してきたという。村には教会があるが、アポニマニアリという神をたたえる独自の精霊信仰が今も存在しているらしい。

## 村民の生活手段

村の人口は、約40世帯（91年以前）である。村の人々はイモなどの農作物の販売、内職や観光業を行うことよって現金収入を得ている。基本的に食料は自給自足だが、電気代や生活用品購入のため、現金収入は必要らしい。

とくに観光業では、91年のピナツボ火山噴火後、その噴火口まで観光客を案内するというガイドの仕事

が主なものである。噴火によつてピナツボ火山の知名度が上がったこと、国の指導が入ったことで村の重要な産業になっている。1回のガイドにつき約300ペソの収入が得られるという。

また、クラーク基地が返還される前は、村に米軍の射撃訓練場があった。そこには米兵が常に駐留し、住民が米軍から直接危害を加えられることはなかったものの、絶えず聞こえる銃声により精神的苦痛を強いられていた。

当時、人々は銃弾の破片を拾い、それを換金することで収入を得ていたが、不発弾の爆発事故や、誤射によつて負傷する人も後を絶

たなかった。死亡者は出なかったものの、身体に障害を負った人もいるらしく、基地の影響が0であったとは言いい切れない。

## 村が抱える問題

村の抱える問題として、まず第一に挙げられるのが教育の問題である。

現在、村には小学校しかなく、教師も2人しかいない。政府の支援で一応すべての子供が学校に通うことができているものの、3学年に1人の教師というのはあまりにも少なすぎる。

また、高校が村にないので、通学するには近くの町かマニラ市内に行かねばならず、その経済的負担のた



木のテーブルにバナナの葉っぱを敷きつめ、 食事タイム



道中、道が割れてて車が通れず…、歩いて着いたコミュニティ

みんな歌を歌うのが好き。みんなで何か歌ってくれた。わたしたちはかえるの歌を歌ってみた(笑)。



め進学を断念せざるを得ない子供も多い。進学できても、村の小学校は学習面で町の小学校より遅れていることが多く、授業についていけなくなることも多いらしい。次に挙げられる問題は医療の問題である。村には病院がなく、病気になると町の病院まで行かねばならない。その際必要な交通費は村の人々にとってかなりの負担となる。よって、設備の整った病院に行く機会が少ないため、病院を敬遠して自宅で出産する人が多いらしい。自宅での出産は伝統的なやり方で行われる。

そして、バリカタン(米比合同軍事演習)の村に対する影響を尋ねたところ、「バリカタンは村から遠い場所で行われているので、村に直接の影響は無い」とのことだった。しかし、NPAなどのゲリラ掃討作戦のため、フィリピン国軍が予告なしに村に入ってきて畑を破壊したりすることが少なくとも今年に入って1回あったらしい。川の近くで遊んでいた子供たちに「国軍のことをどう思う?」と尋ねたところ、みんなが黙ってしまったことを考えると、国軍が村の住民に与える恐怖は相当なものだと思われる。

### 誇り高き先住民

フィリピンは、60以上もの少数民族を抱える複合社会である。彼らは、肌の色などの外観から差別されるだけでなく、政策的に差別されることも多い。例えば、先住民居住地区で鉱山資源が発見されると、そこが彼らの先祖代々暮らしていた土地であろうとも、政府によって強制立ち退きを迫られたりする。また、ダム工事によって土地を失い、町に出て厳しい生活を強いられる人々も多い。彼らが先祖代々住む土地を守り、先住民の権利を守る活動をしているのが、KAMP(全国先住民権利運動)である。KAMPは各地の村で組織された先住民の権利運動の連合組織で、都市に出てきた先住民たちが彼らのもといた土地に帰るのを支援し、彼らが自分たちの土地で独自の文化を持ち続けることを支援している。

今回、アイタ族の村を訪問したとき、私たちと同行した学生グループの中に、KAMPの青年団体であるKATRIBU(少数民族の権利を支援する青年団体)のメンバーがいた。彼らの話を聞いて意外に感じたことは、先住民の若者たちが、自分たちの文化に誇りに持ち欧米文化にあこがれることなく先祖代々の土地を守り続けていたいと思っているということだ。

農園

14人死亡、133人逮捕、数百人行方不明  
ルイシタ農園で暴力的ストライキ破壊

11月16日、フィリピン・タルラック州のルイシタ農園で労働者・幼児14名が警官によって虐殺される事件が発生しました。

この事件はフィリピン

政府による重大な国家テロル・人権侵害であると同時に、スペイン植民地支配によつてフィリピンにもたらされた大土地所有制を一扫し、小作農の解放を求めつづけてきたフィリピン民衆に対する、買弁資本家による大弾圧という性格をもっています。

以下に、この事件に関するメディアの報道を掲載します。なおこの事件についてはその後、04年11月の末にこの虐殺事件について国会調査委員会で証言する予定になっていた農民運動リーダーが自宅で暗殺され、また05年1月6日にも2名の労働者がピケットラインで銃撃されています。それでも労働者たちはピ

ケットを維持しており、中部ルソン最大といわれるこのコファンコ家の製糖工場とサトウキビ畑は2ヶ月ちかくにわたつて完全に封鎖されています。

また、この事件に対し私たちはAASJA京都フィリピン班を先頭として、ルイシタ農園の労働者へ激励の寄せ書きをつくり、現地を手渡してきました。

砂糖会社の労働争議、死者14人に

タルラック州の砂糖精製会社ハシエンダ・ルイシタのストで16日に起きた労働者と警官隊および軍隊の衝突による死者は、子供2人を含む7人の死亡が新たに確認され、合計14人となった。

2歳と5歳の子供2人は、警官隊および軍隊がデモ隊を解散させるため使用した催涙ガスを吸い込んで窒息死した。その一方で警

察官と国軍兵士に負傷者が続出している。なお、発砲による被害者はなかった。

今回の事件について司法省は17日、事件に関与した全当事者に刑事責任があると指摘した。

アロヨ大統領は、埋葬あるいは治療費を支援するため被害者の特定を関係機関に指示した。一方、一族が会社を経営するアキノ元大統領は17日、被害者の家族に弔意を表明した。サント・トマス労働雇用省長官は、労使双方に交渉のテーブルに戻るよう求めた。(Inquirer 04年11月18日)

アキノ元大統領一族の農園ストで7人死亡

フィリピンのアキノ元大統領の一族が所有・経営するルソン島中部の砂糖農園で、賃上げを要求してストライキ中の労働者と軍・警察部隊が衝突、地元メデイ

虐殺被害者の青年労働者ジュワンコ・サンチェス氏の遺影。彼は働きながら大学で勉強し、キリスト教会関係の活動をしていた。



製糖工場に向かう第一ゲートの前で、激布をもって記念撮影。11月16日の虐殺が行われたまさにその現場です。



## 弾 圧

### 04年10月18日 緊急行動よびかけ アナクパウイスのコーディネーター 銃殺される またもやファシストの手で

フィリピン労働組合の全国組織KMUから、以下のメールが届きました。

04年10月15日午後10時頃、パーティリスト政党アナクパウイス（「苦闘する民衆」の意）の地域コーディネーターであるサミュエル・バンディラ、愛称サミーが何者かの手によって銃殺された。またレイテ都市水道労働者協会（L M W D E A）の労働組合リーダー、ベルナード・デヴァラスが重傷を負った。

（中略）

レイテ都市水道局に関連する殺人事件は今回のバンディラのケースで2件目で

アによると、少なくとも労働者7人が死亡、50人以上が負傷する惨事となった。

アロヨ大統領は17日、「労働双方に慎重で冷静な対応を求める」との声明を発表

した。【毎日新聞 11月17日22時31分】

ある。00年9月3日にはレイテ都市水道労働者協会のオルグ、エリアザール・ジョゼフが殺害されている。これは彼が地元メディアに様々な書類を提供し、労働者の窮状を訴えるとともに、水道局内の不正な状態を暴露した直後だった。

バンディラは長い間、嫌がらせ、監視や殺害の脅迫を受けていた。報告によると彼は、フィリピン国軍第八歩兵師団の「戦闘命令」の対象とされていた。生前には携帯電話にバヤンやアナクパウイスなどの先進的な大衆団体への参加についての脅迫を受けていた。一方、KMUはこの事件

に関連してグロリア・マカパガル・アロヨ大統領に責任があることを強調した。「この事件は、国軍や純軍事グループによる労働者への非人道的な人権侵害状況をなくす、あるいは改善するためには、現政権がまったく無力であることを示す新たな事例です。またア

ロヨ政権が政府内の汚職をなくすことに失敗していることをも明白に示しています。フェリシオのような腐敗した政府の役人を辞めさせようとする労働者の抗議が、弾圧や殺害をうけているのですから」KMU議長エルマー・ラボック氏はそう語る。（以下、略）

## 募 集

世界の本当の姿を知ろう！  
フィリピン・スタディーツアー  
参加者を募集しています

この夏、フィリピンの学生たちと一緒に、本物のフィリピンを体験しませんか？

AASJAでは毎夏、フィリピンの全国的学生団体であるLFSと一緒に、約10日間のスタディーツアーを行います。

観光ツアーでは知ることのできない、フィリピンの人々の日常生活にふれるツアーです。それは、日本や世界を現実から見つめるものとなるでしょう。国際化のために本当に必要なのは何か、フィリピンの人たちと交流を深めあいながら、一緒に考えていきませんか？

「行ってみようかな？」と、ちらっとでも思った方は、お気軽に私たちAASJAまでご相談下さい。

### ツアー概要

【期間】 8月後半

【訪問先の例】

都市貧困地区コミュニティ／日本企業で働く人たちの労働組合／農村コミュニティ／フィリピンの大学／元日本軍「慰安婦」との交流／ODAによる開発地域

※主にマニラ首都圏が中心です

【予算】

飛行機代6～7万円（往復）＋現地滞在費約3万円（食費・宿泊費・現地移動費込み）

【Y・S】状況は予想はるかに超えて悪いことを知った。紙の上で勉強することと、実際に人々に出会うことは衝撃が違う。特にモロの学生たちに会った時に思った。フィリピンで出会った人々は自分の置かれている状況を変えようとしてもパワフルに活動していてもすごいと思った。ツアーのメンバーとも真剣に議論できたという経験になった。大学や社会で役立てていきたい。

【M・Y】匂い・表情・気迫から様々なことを学べた。誰かが勇気を出して行動し始めることがとても大切だと思った。一人がまた別の一人とつながり、仲間が増えていくんだと思った。LFSやその他の学生たちと交流できたことがとてもよかった。彼らは自分のことだけでなく貧しい人のことや社会のことを考えて、活動していた。一日一日の

活動はとても地味なものなのにそれを続けることをとても尊敬しているし、日本で自分も実践したい。

【D・K】一つ一つの問題がとても大変なものだけど、長い長い植民地支配の影響がすごく大きいと思った。

歴史的なバックグラウンドが国際的なつながりにおけるフィリピン社会にすごく影響していて、今のフィリピン社会を変えていくためにも国際的なつながりが必要なのだと強く思った。

【T・T】メンバーがすごくよかったあ☆みんな積極的に交流していたし、健康だったし本当に良かった。涙。

実際にフィリピンを訪れて予想以上に運動のつながりが広く大きいと分かった。LFSとKMUのように日本でも学生と労働者がつながれたらいいのになあ。

【M・A】大部分の人が貧困の状況や権利のない状況に追い込まれていることを知って衝撃を受けた。日本は自分の国では法律が整備され貧困がないけど、日本やアメリカがフィリピンの人々に貧困や権利のない生活を強いていると思ってとても辛い。自分が間接的にフィリピンの人々を貧困に追いやっている。

今回のツアーで見たことをもっと日本で知らせていき

たい。

【K・Y】ツアーのメンバーに会えたことと、LFSをはじめフィリピンのみんなに会えたことがとても嬉しい。

政治や社会の不正が不正義が多いことを特に感じた。学びたい・働きたいとすぐその機会を得る人々がないことがとても悲しい。機会均等は必ず達成せねば

ならないと感じた。

卒業後は新聞記者になりたから、日本で不正や不条理を見つめたい。今回の経験は将来にとっても役に立つと思う。ぜひ来年も来たいし、彼氏を連れて来たい。むしろあいつは来なあかん(笑)。

あと、フィリピンのみんなの笑顔がステキ☆子ども達がかわいい☆★

## フィリピンツアー2004 報告パンフレット

発行日 2005年3月5日  
 発行者 反侵略アジア学生共同行動  
 Anti-invasion Asian  
 Student Joint Action  
 連絡先 aasja@bigfoot.com  
 http://aasja21.hp.infoseek.co.jp  
 キャンパ 300円

Special thanks to

フィリピン学生同盟  
 League of Filipino Students  
 アナクバヤン  
 Anak ng Bayan  
 ガブリエラ  
 GABRIELA  
 5月1日労働運動  
 KMU  
 バヤン／新民族主義者同盟  
 BAYAN



カンパ **300**円